

ホログラフィック宇宙と臨死体験の世界

齋藤 忠資

序論

臨死体験がたんに脳による幻覚として説明しきれない要素をもっていることを、先に我々は考察してきた。臨床死が確認されているにもかかわらず、五感では直接知りえず、想像もできないような特異な正確な情報をキャッチしている事例が多数あることが確認された。また全く視覚イメージをもつことのない先天性全盲者が臨死体験中に正確な視覚をもっている例が確認された。臨死体験に幻覚ではない要素があるとすれば、臨死体験を常識や日常意識をこえるような現実のリアリティとして論拠づける科学的な枠組みが次に考察されねばならない。そこで今回はホログラム理論という視点から臨死体験という非日常的な意識現象を解明してみたい。

(A) ホログラムモデル

ホログラムはコヒーレントな光（レーザー光線）が作り出す三次元完全写像である。作業光を被写体に照射して参照光と干渉させてフィルムに収める。フィルムには干渉縞しか見えないが、このフィルムに参照光を照射すると、鮮明で完全な立体像が現出する。どの方角から見ても立体像は完全である。

D. ボームによれば、ホログラフィにみられるように、宇宙には通常の知覚からは隠された仕方で「包み込まれた秩序」があり、この根源的な秩序から、「はじき出された秩序」（我々の通常の世界）が現出する。またはじき出された秩序は再び「包み込まれた秩序」へと包み込まれる。「包み込まれた秩序」は量子エネルギーが純粋な仕方で潜在的可能性として内包されている振動する場であって、通常後の知覚では捉えることができない。これはホログラフィのように固定したものではないので、この宇宙の運動をholomovementとD.ボームは呼ぶ¹⁾。無数の振動する場が干渉パターンを生成しているこの宇宙は、一大ホログラムを形成している²⁾。人間の肉体と意識も、時間と共に変化するエネルギーが振動する一つの干渉パターンであり、この4次元時空内のホログラムに他ならない³⁾。

また「包み込まれた秩序」にはさらに未知の精妙なエネルギー場が「超包み込まれた秩序」が存在し、多次元を構成している可能性がある。

K. プリブラムは、ホログラムでは真に存在するのは周波数領域であり、脳はその振動数を解釈することによって、日常の世界を構成しているので、脳はホログラフィックな宇宙を解釈する一種のホログラムに他ならないとみている⁴⁾。脳内にはホログラムの部分として、宇宙の「包み込まれた秩序」の潜在する振動する場のミニチュアが内包されている。脳が「包み込まれた秩序」と共振することによって意識が発生する。意識は「包み込まれた秩序」と共振することによって変容する⁵⁾。

I. ベントフによれば、非物質的な自己意識はその人間の全情報の集合体であり、コヒーレントな性質を持つので、干渉パターンを形成して、ホログラムとなる。その場合自己意識は作業光に相当し、純粋でコヒーレントな根源光（エーテル光）が、参照光にあたる。情報そのものは非物質的なので、肉体の死後も保存される。宇宙全体は相互作用し、振動する無数の場からなる巨大なホログラムであり、人間はそのスペクタクルの中の一つだけを見ているのすぎない。宇宙全体の全情報センターは、強大なホログラムであり、宇宙心である。この

全情報センターにアクセスできると通常は分からないことでも、すべて分かるようになる6)。

R. Dutheilによれば、大脳皮質と意識とのインターフェイスがレーザー光線の役割を担い、干渉パターンは周波数領域が担っている。大脳皮質は周波数を放射するのにフーリエ変換を用いる。そしてこの周波数がホログラムを形成する。このことは脳あるいは意識によって作られた任意の座標システム内で（日常の時間・空間）生じる。この周波数領域は超光速界（タキオン）であり、投射（射影）されたものは光速以下の世界（通常物質界）である7)。我々の宇宙は根源的な実在のホログラフィックな射影でしかない8)。また意識は（タキオン）の場によって構成されている。意識は本来超光速界に帰属している。超光速界からのホログラフィックな射影は、大脳皮質を通じてなされる。その際大脳皮質は受信する情報と意味を制限するバルブの役割を果たす9)。意識がタキオンの場であれば、タキオンは波動である可能性がある。その場合には意識は通常物質界にホログラムの形で、投射された根源界（タキオン界という本体）の姿であろう10)。

D. ボームによれば、物質の素になる粒子は、広大な量子真空のゼロポイントエネルギーという光の大海の表面のさざ波で、この大海全体がholomovementをなしている。mindに出現する特定の形態は、粒子とアナロジーである可能性があり、大海の表面にはさざ波が立っているが、大海の深い所には波はなく、mindは安らぎを感じる11)。

ここで重要な点は、ホログラムでは2次元のフィルムに3次元の立体像の情報が知覚できない仕方で包み込まれているということである。このことは我々の3次元空間の世界にも、我々には知覚できない仕方で4次元空間の情報が包み込まれている可能性を示唆している。通常は知覚できない、コヒーレントな参照光が照射されて初めて、我々にも4次元空間が知覚できる。このコヒーレントな参照光は、I. ベントフのいう根源光（エーテル光）であり、D. ボームの言う量子真空ゼロポイントエネルギーの光であり、臨死体験者や神秘体験者が垣間見た超自然的な光であると思われる。

またここで看過されてはならない点は、D. ボームの「包み込まれた秩序」はこの宇宙に包み込まれている秩序であって、我々の宇宙からは独立した別の世界を意味していないということである。「包み込まれた秩序」とはじき出された秩序」は重なりあっている（共存）。また、K. プリグラムは、J. エクルズのように肉体とは別個に自己意識という実体が存在するという二元論を唱えているのではなく、存在するのは脳内のホログラム現象のみであるとみている12)。

(B) ホログラムの特性

通常のフィルムと違って、ホログラフィの場合そのフィルムを何等分しても、そのフィルムの断片に参照光を照射すれば、完全な立体像が現出するという特性を備えている。どの部分にも全体の情報が包括されている。ホログラムでは、情報は非局所的で、情報が伝達する訳ではない。現実には我々の宇宙はフィルムのように固定したものではなく、すべての事象が他のすべての事象に包み込まれて不可分の仕方で全体が相互結合して運動しているので（holomovement）、空間の分離・分別がないばかりでなく、時間の分離・分割（過去・現在・未来）もない13)。ホログラムは周波数領域なので、時間と空間という枠組みはない14)。空間上の境界がないということは、非局所性ということであり、遠隔透視15)・体内透視・瞬間移動16)・テレパシーが可能ということである。どこの部分にも全体の情報が包み込まれているということは、どの部分からでも全体が分かるということであり、完全知覚・360度視界が可能となる。時間上の境界がないということは、過去・現在・未来の制約がないということであり、未来や過去の事象でもすべての事象が現在同時に一望できると

いうことであり、予知が可能となる。

I. ベントフによれば、自己意識はホログラムの作業光にあたり、宇宙心(根源光)が参照光に相当するので、自己意識はハイレベルに達すると、宇宙の全情報センターの宇宙心から情報を入手できるので、未来の予知も可能となる¹⁷⁾。臨死体験では、体験者の生涯全体がホログラフィーの形で映し出されることがあるが、これはある時点からその人の全人生が映し出された例であろう(後述参照)。時間と空間の境界がないということは、どの部分も不可分の仕方、相互に結合して、全体として統合体を形成している(Oneness)ということであり、どの時点でもどの場所でも、すべての事象が同時に存在するというものであって、これは遍在ということである。またどの時点でもどの場所でもすべての事象が同時にわかるということであり、これは全知(完全知識と完全理解)ということである。また全体が部分(個)を決定しているという点で、量子コヒーレンスな状態(超伝導・超流動・レーザー光)と共通した特性がみられる。さらにすべての可能性が潜在的な仕方共存(重ね合わせ)しているということは、量子の波動関数の世界と類似している。

従って、D. ボームの唱える「包み込まれた秩序」には「はじき出された秩序」(物質界)のような、時間と空間という枠組み(分離・分割)はなく¹⁸⁾、波動のみが支配する周波数の領域である。そしてすべての事象が他のすべての事象が包み込まれて不可分の仕方相互に結合して、全体としての一つの統合体を形成している¹⁹⁾。さらに「包み込まれた秩序」では、意識も統合された状態にあり、時間と空間の境界を持たないとされている²⁰⁾。

宇宙のホログラムを、宇宙は隠しカメラで撮られた宇宙ビデオ・テープに記録されている磁気パターンを譬えとして用いることによって説明できよう。(ビデオ・テープは固定されているので、宇宙のholomovementを表現できないけれども)過去・現在・未来のビデオテープはすでに撮影されていて、それは宇宙の磁気記録媒体に特定のエネルギーレベルで記録されている。どの部分にも全体が包含されているように、個人は宇宙ホログラフィーの自分専用のコピーを持っている。そして意識の基本的なハードウェアには、テープを見るための自分専用のビデオ装置が備わっている。宇宙が将来どのように変化していくのかが予め録画されたテープもある。しかし存在しうる宇宙、自由選択意志、多角的な角度から観察されるホログラムに関する原理があるので、決定論ではない。意識が現在とみなしているのは、宇宙的ビデオレコーダーの磁気ヘッドを通過しているテープの一部のみである。宇宙ビデオテープに記録されているホログラフィック干渉パターンに意識の周波数を同調させることができれば、未来の事が予知でき、全情報がアクセスできる。

(C) ホログラムとしての生涯展望(life overview)

臨死体験では、体験者が自分の過去の人生を生々と再体験する例があり、人生回顧とセットした仕方、自分の未来を体験してしまう例もあるが、これはすでに考察したように、過去・現在・未来という時間の制約を超えた現象である²¹⁾。

この生涯展望(life overview)の一つの特徴は、体験者の生涯全体の様々の出来事が時間の制約なしに、同時に、かつ一度に現出するということである²²⁾。

代表的な事例としては以下のものがある。

「私が17才の時、海の中で殆ど溺れかかっていた時、私の人生全体が光の中にあった。順序を追ってではなく、すべてが一度に。我々が考えているような時間は存在しないことがわかった。」²²⁾

「人生回顧には過去・現在・未来の区別なく、すべてが一度に出現した。」²⁴⁾

「生まれた時から、ソファで息絶え、暖かいトンネルに入って行くまでの27年の人生

すべてを、ほんの一瞬の間に体験してしまった。」²⁵⁾

臨死体験者の生涯全体が、ある時点とある場所で同時にコンパクト化された形で現出したということは、過去・現在・未来という時間の制約がないのみでなく、空間上の分離もない事(非局所性)を示しており、これは正にholomovementの世界に他ならない²⁶⁾。

事実、臨死体験者自身が自分生涯を展望するシーンはホログラムのようであったと述べている事例がある。「life review(誕生から現在まで)がホログラフィックなイメージのように私のまえに展開した。」²⁷⁾

「目の前に大きなスクリーンが現れた。そこに今までの私の人生が時代を追って、3次元スライド映画のように映し出された。」²⁸⁾

「子供時代のシーンをホログラムのような映像でたどった。」²⁹⁾

「目前で再現される私の人生は、精巧なホログラムのように、とんでもないスピードで進んでいった。」³⁰⁾

臨死体験のlife reviewのシーンは、通例は立体像であったと報告されている³¹⁾。

臨死体験者は、自分の過去の人生を追体験する際に、ただ傍観者としてそのシーンを見るのではなく、相手の立場になって、すべての人とすべてのものと共感し、相手を完全に理解し、すべてのものと相互に結び付き合い、万物は一体であることに気付かされる³²⁾。これは宇宙の本質は不可分の全体性であり、全体として一つに統合されたOnenessであることを意味している。臨死体験者が、人生を回顧するときには、超自然的な光の存在が同伴している場合が多く、光の存在は完全な知識と完全な理解を持ち、体験者を無条件に受け入れ、光の世界では時間と空間の境界はなく、万物は相互に結び付き合っ、不可分の統合体(Oneness・一体性)を完全な仕方を実現している点から見て、人生回顧のこのような特徴は超自然的な光と関係しているものと考えられる。

(D) ホログラムとしての遠隔透視・瞬間移動

肉体から離脱した自己意識は物質界の空間の制約から解放されて空間上の分離・境界がなく、空間は相互に結合して不可分の全体(Oneness)を形成しているので、遠隔透視と瞬間移動が可能となる。ある場所に行こうと思っただけで、その瞬間にその場所に自分がいるのに気付くと多くの臨死体験者は証言している。体外離脱した未知のエネルギー体が、地上の別の場所や暗いトンネルを空中飛行する場合には、飛行途中の状況が知覚されるが、瞬間移動の場合には移動の途中のプロセスは一切なしに、瞬間に移動する。体外離脱した超意識が実際に異なる場所に移動すれば、瞬間移動であって、移動しなければ遠隔透視であるが、その点が明確でないケースがあるので、両者を区別することは実際には難しいことが多い³³⁾。

ここで重要な点は、臨死体験中に行った場所や会った人物の状況が事実と正確に一致していることが後で確認されているので、この現象を単なるイメージ現象として済ます訳にはいかないということである。

それではホログラムでは何故瞬間と空間の制約がみられないのであろうか？ホログラムでは、すでに指摘したように、3次元空間内に4次元空間が包み込まれている可能性がある(包み込まれた秩序)。従ってホログラムは4次元空間説と本質的に関連している。4次元空間では、すでに考察したようにこの通常の時間と空間の制約からは解放されているものと考えられる³⁴⁾。

ホログラム現象であるthought・form(Eの項をみよ)が4次元空間と解されている事例がみられる。

「次第に私は私の肉体やベッドだけでなく、家全体の中にあるすべてのものと庭、さらに

私が向ければロンドンやスコットランドを見ることができると気付いた。私はこの時空間から自由であった。・・・4次元は3次元空間の中にあるすべてのものの中にある。また同時に3次元空間内のすべてのものは4次元の中にある。・・・4次元界の現在は3次元界のことと同じである。即ち4次元のものは現在において至る所にある。3次元的視点での、ここにすべてのものがあるように」³⁵⁾

臨死体験の世界がホログラフィックなものであれば、全体の情報はどの部分にも内包されているので（非局所性）、すべてのものは究極的にはその空間的位置が固定している訳ではない。従って肉体から離脱した意識は、物質界の空間の制約から解放されて、どの場所にも思いのままに瞬時に移動できるものと考えられる³⁶⁾。これは、量子テレポーテーションや量子ジャンプと呼ばれている現象と関連していよう。ホログラムはレーザー光線（コヒーレントな光）によって構成された周波数領域なので、周波数が変わればテレビのチャンネルの切替のように目的地までの移動プロセスが全く欠如しているので、遠隔透視と実際には区別するのが難しい。

ここで看過されてはならない点は、体験者は行きたい場所や会いたい人物等を頭の中で思い浮かべているということである。これは(E)で述べるthought formとの関連を示唆しており、この点からも遠隔透視と瞬間移動現象がホログラムであることを示していよう。

体外離脱中に瞬間移動した体験者自身も、ホログラム説を支持している。T.M.ケネディ（アメリカ人）は、モンロー式の体外離脱を試みていた時、「アメリカの両親のことを考えると、一瞬のうちにホログラムの様にアメリカの故郷が見えた。世界の様々な地域が、そこに行きたいと思うだけでホログラムの様に見えた³⁷⁾」という。

「体外離脱中でも壁と家具が青紫の光の中に現れ、壁と家具を見ることも、壁と家具を通して見ることも同時にできた³⁸⁾。」

①遠隔透視・瞬間移動の区別の困難な事例。

別の臨死体験者は次のように証言している。「望遠レンズのように、相手との距離を思うとおり調節できる。相手の方を自分に引きつけることも、自分を相手に近づけることも思いのままであった。救命処置が行われた診察室のすぐ外側まで移動。自分の見たいと思う所がどこでも見えた。外の駐車場も覗けた。私は廊下にいたが、外の駐車場はどうなっているかなと思うと、自分の脳の一部がそこに出かけて、そこを見て、戻ってきて教えてくれるという感じだった。病室のランドリーでもすごい音を立てているのも分かった。そこには大きなボイラーがあった。何ヶ月後、この病院に見舞いに行った時、病院のカフェテリアに入ったが、私が見たのと全く同じだった。細かいところまで同じだった³⁹⁾。」

この例では、遠隔透視だけでなく、透聴まで含んでいる。臨死体験中の他の瞬間移動の例の中には次のような証言もみられる。「大騒ぎになり、救急車の周りを人々が駆け回っていた。この人達は何を考えているのだろうと思って、誰かに目を向ける毎に、まるでズーム・レンズで見ているように、その人が大きく映し出される。そして私もそこにいた。

でもあれは私の一部分の様でした。—あれは私の精神と呼ぶことにするが—あれは相変わらず私が元いた場所にいた。私の物理的肉体から数ヤード離れた所です。私が遠くにいる誰かを見ようと思うと、私の一部がトレーサー（追跡標識）のように、その人の所へ行く様な感じがした。それにあの時は、世界のどこで何が起こっても、私はちゃんとそこに行き、現場に居合わせる事ができるように思えた⁴⁰⁾。」

②明らかに瞬間移動である事例。

あるベトナム帰還兵は、戦場で臨死体験をし、体外離脱中に手術室から戦場の負傷した現場に戻って現場の様子を見ていた時、「・・・すると次の瞬間、急に救急ヘリポートにいたんです。・・・まるでそこに突然姿を現したと思ったら、次の瞬間こっちに移動したみたいなものです。まばたきする瞬間に移動したみたいですよ⁴¹⁾。」

「私は瞬間に宇宙のどこにでも行ける様に感じた。私は自分の家族のことを思った。その瞬間、私のエネルギーが自宅の裏庭にあるのに気付いた。裏のポーチの上に浮上して台所の窓から家の中を覗いた。十羽の鳥が窓台にいた。飛び去ることなしにその場に移動できることに私は驚いた⁴²⁾。」 キルデは自己催眠による体外離脱に成功した時、自分が肉体が死んでしまうのではないかとパニックに陥り、思わず「お母さん、助けて！」と呼んだ途端、千キロも離れたヘルシンキの両親が住む家の居間に飛んでいた。「居間には私の母と姪がいました。私の姉の5才になる子供です。彼女は床に座り込んで絵を描いていました。母は花模様のロングドレスを手縫いで仕上げていました。どうやら母が、姉から子供を預かって面倒を見ている様子でした。姉はどこに行ったのかしらと思った途端、またポンと場面が変わって、きらびやかなカクテルバーで姉が男の人と楽しそうにお喋りしているところが見えました。姉さんのご主人はと思って見回しても見当たりませんでした。そういう場面を見てもつまらないので、もう自分の家に帰りたと思った途端、またポンと場面が変わって、千キロ離れたラップランドの自宅に戻り、ベッドの上の自分の肉体の上のあたりを漂っていました。」後で自分が体外離脱中に見た場面を確かめると、事実と全く一致することが判明した⁴³⁾。

「不意に私はトロカデロ・プレイス（パリの地名）のことを思ったのです。信じ難く聞こえるでしょうが、私は突然そこにいたのです。ヘンリー・マーチン通りの正しく入り口に、暗くて寒い雨空の印象は痛ましい気分と共に、今でも私に残っています。私はあなたのことを考えました。すると次の瞬間には、あなたの仕事場にいたのです⁴⁴⁾。」

「かなり怖さを感じました。唯ある物を見て、そこに近づきたいと思うだけでその方向に前進すると言うことに。私は実際には足を一步踏み出すことさえする必要がありませんでした。直立したままスルスルと進んでいったのです。その加速が怖く感じられました。」

「私は病棟のドアを通れるだろうかと考え始めていました。するとドアのノブを見た時、私はそこに向かって全身し始めたのです。段々と速くなり、私は恐ろしくなりました⁴⁵⁾。」

木内鶴彦は、臨死体験中に瞬間移動を体験している。母のことを思った瞬間、今度はおふくろが公衆電話をかけようとしているその場所に私はいた。・・・田舎にいる実の兄貴の所に行くことを考えた。すると今度は兄貴の目線で車の運転をしているのであった。・・・

「俺は大丈夫だ。」と言い残した病室に戻ろうと考え、突然また病室にいるのであった⁴⁶⁾。臨死体験中に見たシーンが事実と一致していることが、後で確認されている⁴⁷⁾。

マリアは体外離脱して、集中治療室の天井のコーナーから蘇生術を施している医師達の様子を上から見ていたが、「窓の外の何かがちょっと気になった。そうしたら瞬間的にその地点まで移動していったみたい。・・・最初マリアは緊急処置室の窓のすぐ外の、病室の玄関の上あたりの空間に止まっていた。その時見た様子は事実と一致していた⁴⁸⁾。」

ある婦人が旅行中ホテルのガス漏れが原因で窒息。医師は死んだものと断念した。その間にこの女性は体外離脱をして、家のことを思った瞬間、家の夫の寝室にいるのに気付いた。・・・彼女はホテルの自分の肉体に戻らなくてはと思った途端、ホテルの自分の肉体に戻っているのに気付いた。体外離脱中に見た家の様子を後に確かめると、全く事実と一致していることが分かった⁴⁹⁾。

③明らかな遠隔透視の事例

「さまよっている間、建物の壁を通して見える不思議な知覚があった。そこには壁があり、透けて見えるだけであることは分かった。一人の陸軍衛生隊軍医が（この軍医のことを私は全く知らなかったのだが）、病院の別の場所にいたが、病状が悪化して死去した。私は見た。患者が彼の死に気付かないように、彼の足から履き物を脱がして、こっそりと運び出すのを見た。後にこのことを看護婦に聞くと、その通りであることがわかった⁵⁰⁾。」

(E) ホログラムとしてのthought-form

K.リングは、臨死体験ではより高い周波数の4次元空間に意識が移行し、意識は周波数を解釈するためにホログラム的に機能すると解している⁵¹⁾。K.リングによれば、臨死体験にみられるthought-forms（心が生み出すイメージ世界）は、干渉波がホログラム的な写真板上でパターンを形成するように、イメージのパターンに結合する。参照光（レーザー光線）を当てると、ホログラフィックなイメージがリアルな仕方で現出するように、thought-formsの相互作用によって作り出されたイメージはリアルな物として現出される⁵²⁾。R. Dutheilも臨死体験者が垣間見た世界は、人間の思念に基づくホログラムであるとみている⁵³⁾。M. タルボットも、臨死体験の世界は、人間の心の願望や思念が生み出すホログラフィックなものであるとみている⁵⁴⁾。R. A. Monroeによれば、体外離脱の世界には時間と空間はなく、思考がホログラム状に変容する可能性があり、意識は波動パターンとして存在する領域である⁵⁵⁾。

ホログラフィの参照光の役目をするのは、K.リングは人間のmindである⁵⁶⁾と解しているが、臨死体験者が移行するのは、正に非物質的な世界であり、この光が参照光の機能を果たすものと思われる。光の世界のエネルギーは自ら光を外に放射しており、このオーラが体外離脱後の周波数を高めた人間の意識と相互作用して、ホログラフィを生成するのである。このことを裏付ける臨死体験の事例がある。「・・・一緒に私の人生の場面を見ていた人物がいるのに気付いた。・・・闇を貫いてきた何本もの細い糸が見えた。幾筋ものレーザー光線が黒いシーツを貫いて射し込んでいるように感じた⁵⁷⁾。」

ホログラムの世界には、すでに指摘したように、物質界のような時間と空間の制約はなく、全体が相互に結合し、不可分の仕方で統合体を形成しているので、物質界のような固定した対象（物体）は存在しない。主体と客体の区別が厳密なものではないであろう。臨死体験の世界は普遍的な固定したものではなく、体験者によって多様性がみられるが、この点はthought-formに基づくホログラム説によって説明できよう。またthought-formは慣れ親しんだ、この物質界によって培われるので、臨死体験の世界はこの世界と似たものとなる⁵⁸⁾。W. Buhlmanも体外離脱後の世界は意識がより高い周波数の非物質界との相互作用によって生成するthought-formであり、ここからこの世界の多様性と物質界との類似性が生じると述べている⁵⁹⁾。

以上の点からみて、臨死体験の世界は本質的にはホログラムの原理によって生み出されたイマジナルな世界（H. Corbin）と言えよう。

この物質界も、臨死体験者が垣間見た非物質界もホログラムの原理によって構成されているのであれば、両者の違いはグレードの違いであって、本質（原理）上の違いではない。また非物質界がすべて人間の心の願望を投影した世界でしかないと言うのではない。ホログラムを生み出す根源光は、真の実在そのものである。

臨死体験の世界が、thought-formに基づくホログラフィックな世界である。典型的な事

例をいくつか挙げてみよう。

「光のエネルギーの渦の中に小さな茶色の点が現れたかと思うと、大きくなって死んだ母が、私の子供の時の記憶と同じ姿で現れた。死んだ兄と死んだ友人の娘も現れたが光のエネルギーが振動し始めると消え去ってしまった⁶⁰⁾。」

「私がトンネルの中に入ると、（熱のない）きらめくエネルギーのブルーの場が、私の方へトンネルを浮動して降りてきた。—その発光するブルーの場の魂は、私の旧友の姿になった。（彼はヴェトナムで死亡していた）⁶¹⁾。

この二つの例は、死者のヴィジョンが体験者のthought-form（死者の面影）に基づいて、根源的な光のエネルギーによって生成されたホログラフィであることを示している。C. Green はアストラル体が肉体が着ていた服を着ている傾向があると指摘している⁶²⁾。R. A. Monroe も体外離脱状態は我々の想念習慣によって形成され、未知のエネルギー体が服を着るのも、裸を避けようという習性からであると述べている⁶³⁾。その典型的な例を挙げると、「人はオーラに囲まれているので服のことを考えるやいなや、その思考自体がすでにその人の衣服を作っていることに気付く。ある時私は自分のアストラル体を囲んでいる放射物によって、服がそれ自体で形作られていくことに気付いた。その服は正確にその時私（の肉体）が着ていた服でした。（アストラル体の姿で）無意識状態から目覚めて、人はすでに自分が服を着ていることに気付く！潜在意識が服を出現させるので、必ずしも意識的に装わせる必要はない⁶⁴⁾」。「体外離脱直後、魂はクラゲの様に見えたが、次第に人間の完全な形姿になる。私は半透明で青味かかって、完全に裸のように見えた。二人の婦人に裸体を見られたくないので、ドアの所に逃げたが、衣服を被っていることに気付いた⁶⁵⁾。」また体外離脱現象が物質界から高周波領域への移行に伴うホログラムであれば⁶⁶⁾、移行にまつわる多様なイメージ（トンネル、円筒、通風孔、溝、地下道など）がみられることも説明できよう。バリアや光の存在のイメージにも多様性がみられる。

(F) 結論

- ① コヒーレントな光子によって作る出されるホログラムは、宇宙がD ボームの提唱するようなホロムーブメントであり、包み込まれた秩序とはじき出された秩序とが共存している可能性があり、K. プリブラムの主張しているように、脳は宇宙のホログラムの中のミニチュア版である可能性がある。
- ② ホログラムの周波数の領域（包み込まれた秩序）には、空間と時間の制約（分離）というものはなく、すべては不可分の統合体として相互に結合している。時間の制約がないということは、予知が可能であるということであり、空間の制約（分離）がないということは（非局所性）、透視やテレポーテーションや360度視界や完全知覚やテレパシーが可能ということである。
- ③ 時間と空間の制約を超えた臨死体験の現象として、生涯展望があり、過去の人生の出来事を瞬時にしてフラッシュバックし、また自分の未来をみるという事例がある。未来の自分の姿は、後に確証されている。
- ④ 臨死体験の世界では、時間と空間の制約を超えているという例は、遠隔透視とテレポーテーションという現象にもみられる。この時得た情報は事実であることが確証されている。
- ⑤ 臨死体験はthought-form というイマジナルな世界の性格を備えているが、これは正に

ホログラフィックな特徴と言える。

[註]

- 1) D.ボーム, 全体性と内臓秩序, 260-270頁, 青土社, 1986 ; D. Bohm & B. J. Hiley, The Undivided Universe , pp.357-382, London:: Routledge, 1993.
- 2) I. ベントフ, 超意識の物理学入門, 17 頁, 日本教文社, 1987; 浜野恵一, インナー・ブレイン, 79頁, 同文書院, 1993.
- 3) I. ベントフ, 超意識, 228頁 ; K.ウイルバー編, 空像としての世界, 51 頁, 青土社, 1986.
- 4) K. ウイルバー編, 空像としての世界, 18. 22. 52. 60頁, 青土社, 1986.
- 5) 浜野恵一, 脳と波動の法則, 106-110頁, PHP研究所, 1997.
- 6) 超意識, 17.21-23. 208-212頁。
- 7) E.E.Valarino, On the Other Side of Life, pp.208-209, New York : Plenum Press, 1997.
- 8) Side, p.193.202.
- 9) Side, p.202.
- 10) Side, p.207.
- 11) R. Weber, Dialogues, pp. 44-49.
- 12) 現代科学の巨人10, 319-342頁, 旺文社, 1985.
- 13) K.プリグラム, 脳機能に関するホログラム仮説, S.グロフ編, 個を超えるパラダイム, 203-204頁, 平河出版社, 1987.
- 14) K. H. Pribram, Holographic Memory, Psychology Today, vol.12, pp. 83-84, 1979.
- 15) 遠隔透視と非局所性との関連については, R. Targ & J. Katraも指摘している。(Miracles of Mind, California: New-World Library, 1998) 遠隔透視は意識の解離状態時に生じるといふ。
- 16) 現代物理学でも光子の量子力学的状態を変えずに, 別の場所にする実験が成功している (A.ザイリンガー, 量子テレポーテーション, 日経サイエンス, 26-38頁, 2000年6月号)。
- 17) 超意識, 210-212頁。
- 18) K. Welber, Dialogue With Scientists and Sages, p. 45, London: Routledge & Keganpaul, 1987.
- 19) D. ボーム, 全体性, 260-267頁。
- 20) D. Bohm & B. J. Hiley, Universe, p. 386.
- 21) 拙論, 4次元空間と臨死体験, 人間文化研究, 9巻, 6-14頁, 2000.
- 22) その他の例としては, P. M. M. Atwater, Beyond the Light, p.59, A Birch Lane Press, 1994 ; D. Morrissey, You Can See The Light, pp. 29-30, Stillpoint Publishing, 1997; I. Curri, You Cannot Die, p. 155, Methuen, 1978 ; R. Moody, Life after Life, pp.64-69, Bantam, 1975; G. Doore (ed.) What Survives ? pp.63-64, Los Angles: Jeremy P. Tarcher, 1990.
- 23) R. Summers, The Wave of Light, Agadir Press, 1994.
- 24) Ph. L. Berman, The Journey Home, New York: Pocket Books, P.35, 1996.
- 25) A. フェニモア, 臨死体験でみた地獄の情景, 130頁, 同朋舎出版, 1995.
- 26) K. Ring, Lessons from the Light, pp.149-152, Insight Books, 1998.
- 27) Ph. L. Berman, Home, p. 35.

- 28) A.フェニモア, 地獄, 121頁.
- 29) 同書, 128頁。
- 30) B. イーディー, 死んで私で私が体験したこと, 166頁, 同朋舎出版, 1995.
- 31) D. Morrissey, Light, p. 29, ; G.Doore(ed.), What Survives ?, p.63 ; I. Currie, You, p. 155.
- 32) K. Ring, Lessons , pp.176-177, ; D. Lorimer, Whole in One, Arkana, 1990 ; A. フェニモア, 地獄, 121頁; S.S. Farr, What Tom Sawyer Learned from Dying, p.35, Hampton Roads Publishing 1993 ; P.M.H.Atwater, Light, p.59.
- 33) 「Travelling Clairvoyance」という表現がある。
- 34) 拙論, 4次元空間を参照。
- 35) S.Muldoon & H.Carrington, The Phenomena of Astral Pfojection,pp.73-74, London : Rider, 1957.
- 36) M. Talbot, Holographic Universe, p.234, Harper Perennial, 1991.
- 37) 立花隆, 臨死体験（下）, 197-198頁,文芸春秋, 1994。
- 38) C.Green, Out-of-the-Body-Experiences, p.79. Institute of Psychophysical Research,1968.
- 39) M.B.セイボム, 「あの世からの帰還」, 54-55頁,日本教文社, ,1986.
- 40) R.A.Moody, Life,pp.51-52.
- 41) M.B.セイボム, 帰還, 54頁.
- 42) K. Ring, Lessons , pp. 15-16.
- 43) 立花隆, 臨死体験（上）, 171-174頁,文芸春秋, 1994.
- 44) I.Currie, You, p.103.
- 45) 以上2例。I. Currie, You. p.103.
- 46) 宇宙の記憶, 38-39頁, 龍鳳書房, 1995.
- 47) 同書, 56-57頁。
- 48) J.アイバーソン, 死後の生, 110頁,NHK出版, 1993。
- 49) R. Crookall, Out-of-the Body Experiences and Survival, in J. D. Pearce-Higgins & G. S. Whitby (eds.), Life, Death, and Psychical Research, p.73,London: Rider & Co. Ltd, 1973.
- 50) G.N.M.Tyrrell, The Personality of Man, pp. 200-201, Penguin Books, 1946.
- 51) Life at Death, p. 237, New York: Guill, 1982.
- 52) Life, pp.246-248.
- 53) E. E. Valarino, Side, pp.221-222.
- 54) M. Talbot, Universe, pp.234-235.
- 55) Journeys Out of the Body, , p.184, Anchor Books 1971.
- 56) Life, pp.246-248.
- 57) A. フェニモア, 地獄, 147-148。 .
- 58) K. Ring, Life, pp.246-249; W. Buhlman, The Secret of the Soul, p.82. Harper San Francisco, 2001.
- 59) Adventures Beyond the Body, pp. 91-92, Harper San Francisco, 1996.
- 60) 立花隆, 臨死体験（下）, 222頁,文芸春秋, 1994.
- 61) N. Dougherty, Fast Lane to Heaven, p.19,Hampton Roads Publishing Company, 2001 .
- 62) C.Green, Out-of-the-Body .
- 63) Journeys, p.183.
- 64) S. J. Muldoon & H. Carrington, The Projection of the Astral Body, pp. 208-211, Rider,

1956.

- 65) F. W. H. Myers, *Human Personality and Its Survival of Bodily Death*, p.213, University Books, 1961.
- 66) 拙論,波動の世界と臨死体験, 人間文化研究,10巻, 7-8頁, 2001。